

保坂俊司 著

『戒名と日本人』

—あの世の名前は必要か—

祥伝社新書、二〇〇六年

加島 亮伸

本書は、「第一章 戒名とは何だろうか」「第二章 仏教史から戒名を考える」「第三章 日本人の靈魂観と戒名」「第四章 墓や位牌と戒名」「第五章 戒名は必要か」の五章からなる。タイトルからして、日本について多くの紙幅が割かれているのは当然であるが、仏教の「戒名」「戒律」をキーワードに、インド・中国・日本の仏教史を通視した書、あるいは仏教概論とみてもよい。著者自身も「仏教の発展の歴史は、思想の展開の歴史であると同時に、戒律改変の歴史でもあります」と記されている。

さて、現代日本の仏式の葬送において、死者が授かる戒名は、死後の名前として日本人に浸透している。しか

し、本来であれば、仏教に則った生活を誓ったことの証として、「戒名」をいただくのが、その意義であるはずである。著者も、インド本来の戒名は、戒律の意味を理解し、その尊厳を誓った仏教者が出家の際に授かる、生前の名前であったとしている。

なぜ、現代の日本において、生前の出家信者の証である戒名が、自身が仏教者であるという自覚の薄かった（あるいは全く無かった）死者に授けられるようになるのであろうか。また本来、財力は戒名の格には関係ないが、日本社会一般では、いわゆる「戒名料」が問題とされてきたのはなぜなのか。著者は、「それは古来から死の穢れを恐れてきた日本人が、仏教を世俗的に変化させ、時代を超えて受け継いできた文化の蓄積だ」と主張される。また、「戒名の存在意義を問うことは、仏教や葬送儀礼の歴史を理解するにとどまらず、日本人の死生観の真髄に触れることにもなる」とも言われるのである。

中国仏教においては、いわゆる「悟り」の場を日常生活にまで降ろしてることが可能となった。このことは、中国仏教がすでに大乘であったことを意味するが、民衆の生活にまで浸透していたとはいえない。

続く日本仏教において最澄は、奈良仏教に対して「大乘戒壇独立」を宣言した。著者はこのことを「インド以

来の仏教の戒律と教えのねじれ現象を解消するという画期的なものであった」と説明される。つまり、最澄が自ら奈良・東大寺の戒壇院にて受戒した小乗戒を棄捨したこと、そして大乘仏教の菩薩戒を主張したことは、インドの伝統的な小乗戒がすでに中国において理論上否定されていたにもかかわらず、日本においても相変わらず、授けられ続けていたからであるとされる。

やがて、最澄が開いた叡山仏教からは、鎌倉仏教の祖師方を輩出する。その内の親鸞に至っては、「南無阿弥陀仏」の一声で救われると主張し、戒律などの自助努力は不要となった。

そして、江戸時代となり、与えられた職業のすべては救いの道と同一視できると考えられるようになる。つまり、特定の職業に限定する第一段階（華道、茶道、能などの宗教性の高い世俗業）、すべての職業が悟りへの道であると考えられる第二段階の順序はあったものの、最終的には、日常生活における諸行、特に各種の職業を悟りの道にまで高めることができるようになったのである。その提唱者が鈴木正三で、「世法即仏法」「世俗業即仏業」の思想へと至り、『万民徳用』において、「この世の生活の一切は、仏道修行となる」といつており、その考えは、日本人が、仕事に報酬を得る手段以上の意味を見出していることに影響していると述べられている。

生と死はセットである。生まれつばなしということはない。著者は、

「死を特別に忌み嫌う日本文化においては、死者は、死の世界の住人として、隔離しなければなりません。死者が生前の名前を使っていたのでは、居心地が悪いのです。そのため、死者の名前としての戒名は好都合でした。それをもらえば仏の世界で、安楽に暮らせるということになっており、残された者も死者の霊に脅かされることなく住み分けができます」と述べられている。

私の身近に「生前戒名」(逆修)を授かることにより、普段の生活にメリハリができ、自分のいのちが輝いていると感じられるようになったという方がいる。はたして、自分の死後の名前は何になるのであろうか。

本書によって、あらためて日本仏教の本質を知ることができるとともに、そのような思想の中に先祖を含めた私も生きてこられたことに喜びを得られる書である。多くの方に一読をおすすめする次第である。

木村恵子 著

『キーフさん』

——ある少年の戦争と平和の物語』

近代文芸社、二〇〇六年

足立 智孝

本書は、エッセイストの木村恵子氏が、日本のバイオエシックス（生命倫理）分野のバイオニアである夫の木村利人先生の幼少期から現在に至る半生を綴った作品である。木村先生の語る自らのナラティブ（物語）を恵子夫人が書き記した形式でまとめられている。本書を読むと、まるで木村先生が目の前で自らの半生をわれわれ読者に語りかけているかのような、感覚にとらわれる。木村先生の熱い思いが恵子夫人の文章に形を変えて書かれたような作品であり、四十年近い時間を共有されてきた御夫妻による共同プロジェクトの結晶と言える作品に仕上がっている。

本書では木村先生の幼少期の戦争体験とその後の人生

での戦争の傷跡に直面した経験から、平和を考え、平和であることの尊さが訴えられている。しかし木村先生の下でバイオエシックスを学んできた紹介者にとつては、それだけに留まらないメッセージ、つまり木村利人バイオエシックスの原点を読み取ることができる。

『プロローグ』では、第二次世界大戦後の昭和二十二年（一九四七）年に当時中学二年生だった利人少年が、進駐軍将校のレオン・キーフと出会うことから始まる。少年は自分の名を「プロファイットマン」「利人」「ツリー」「木」 ヴィレッジ「村」と丁寧に英訳して挨拶する。そして微笑みながら差し出されたキーフさんの大きな掌と握手すると体中がぼかぼかと温かくなり、「本当に、あの人は、僕たちの「戦争した」敵だったのだろうか」（二八頁）という素朴な疑問が頭に浮ぶ。この疑問は本書の一貫したテーマになっている。

キーフさんとの出会いから少し時間をさかのぼり、第一章の「軍国少年」では、戦時中の利人少年が、いかに軍国主義教育の優等生だったのが、いきいきと描かれている。「軍人勅諭」、「教育勅語」を暗唱し、「御真影」を祀る祠の前では最敬礼し、「大きくなったら軍人になつてお国のために戦う」（二七頁）ことを疑わない毎日を送っていた。

都市部への空襲の危険性が高まった昭和十九年八月

に、利人少年は東京九段の両親の元を離れ山梨県猿橋町に学童疎開する。そこで、東京大空襲による自宅の消失、広島、長崎の原爆投下、そして敗戦を体験する。生まれた時から戦争をしていた国に育った少年にとつては、「戦争に負けたということがどういうことなのか、僕にはさっぱりわかりませんでした」（五三頁）と告白し、これからの生活への不安を抱く。

第二章「バスケットシューズ」では、敗戦後の生活の変化に対する心の葛藤が描写されている。学校では教科書の大部分を墨で塗りつぶし、「忠君愛国 神国日本の軍国主義は、敗戦を境に無理矢理ぬりつぶされ、否定され、はがされて」（七三頁）いった。しかし、「何故こういうことをしなければならないのか、或いは自分たちが教えてきたことは間違っていたのだ、と僕たちに対してはつきり言ってくれた先生はだれもいませんでした」（七二頁）と述べ、「僕は今まで信じていたことが、ことごとくひっくり返され、一体だれを信じたらいいのか、何を信じたらいのかわからなくなり、心は宙にういているみたいな毎日を送って」（七三―七四頁）いた。

そんな中で、久しぶりにキーフさんを訪ねると、変わらない笑顔があった。同僚のトムやチャーリーに紹介され、自宅に招かれ食事をご馳走になり、擦り切れて穴の開いたバスケットシューズを新品に買い換えてもらい、

楽しい時間を過ごす。時間が楽しいほど、「本当にこの人たちは敵だったのだろうか？」（七八頁）という素朴な疑問がまた頭の中に浮んできた。

第三章「傷痕」では、その後の木村先生の一生を決定づける、象徴的なできごとが紹介されている。クリスチャンになった先生は、一九五九年にYMC A主催の国際ワークキャンプに出席するためにフィリピンに行く。そこで第二次大戦の生々しい傷跡に遭遇する。親しくなったキャンプ仲間のフィリピン人から、父親が日本兵によって殺害されたことを聞き、戦慄を覚える。しかしその友人の「忘れることは出来ないけど、許すことは出来ると思う。僕たちが、友達になつて、もう二度と戦争をしないようにすることが、僕たちに与えられた使命だ」（九二頁）という言葉を反芻し、旧約聖書の詩篇の四十七章を参考に「しあわせなら手をたたこう」という誰もが知っている歌詞を生み出したのだった。この歌には多くの犠牲の後に得た幸せを「態度で示す」ことが大切だという強いメッセージが込められていた。

一九七〇年から二年間、ベトナム戦争の只中に木村先生は東南アジア比較家族法を教えるためにサイゴン大学に赴任した。あるとき先生の自宅を訪ねてきたベトナム人学生から、米軍の「枯れ葉作戦」が自然の生態系を壊

滅している衝撃的な事実を聞かされる。その影響は自然環境に留まらず、奇形児、死産、自然流産の多発や、枯れ葉剤の成分であるダイオキシンによる海産物汚染を通して、人間の遺伝子までも破壊するというものであった。ちょうどそのころ読んでいたG・R・テイラーの『生物学的時限爆弾』の中でいう「未来の遺伝子戦争」が現実になり、しかも自らも巻き込まれてしまったことに驚き、それまでの法学研究から、「いのちにかかわる価値判断や倫理の問題を考える」バイオエシックス研究へと方向転換したのだった。

第四章「終わらない戦争」では、米国のバイオエシックス研究に「戦争」に関する極秘文書を発見したことからかつての敵国で体験した「戦争」が語られている。なぜ、ナチスドイツの人体実験に関わっていた医師たちは、ニュルンベルク国際軍事裁判で断罪されたのに、同じように人体実験を行った日本軍の「関東軍防疫給水本部 満州第七三一部隊（石井部隊）」は起訴されなかったのか、その理由を示した文書を米国立公文書館で発見した。米国防軍の研究者によれば、石井部隊の資料は、「……長期にわたる研究成果であり、われわれの実験室では、人体実験につきものの良心の呵責にはばまれ、とても得ることができない貴重な資料」（二二八頁）だったので、その資料を手渡すことと引き換えに、石井

部隊の隊員たちは戦犯としての告発を免れたのだった。もし自分が隊員だったとしても反旗を翻す勇気があったかどうかかわからないと前置きし、木村先生は「僕が今できることは、この負の遺産を次の世代に語り継ぎ、二度と同じ過ちを繰り返さないようにすることだ」（二二六頁）と決意している。

一九九五年六月に戦後五十年を記念して広島に原爆を投下した「エノラ・ゲイ」を展示する「スミソニアン原爆展」が開催された。展覧会の当初の企画は、「原爆をめぐる歴史的背景から、原爆が本場に必要だったのかの討論を含めた、原爆投下の全体像を示す」ものであり、アメリカ人の原爆に対する一義的な見方に対する問題提起をするものであった。しかしこの企画はアメリカ議会を巻き込んだ強力な反対運動に会い、「この展示の初めの企画に見られた、アメリカ人の勇気と善意にみちた、歴史への挑戦は片鱗もうかがえない、グロテスクな物体「エノラ・ゲイ」の展示」（二四五頁）になってしまった。米国の原爆に対する自己検証への期待は裏切られ、木村先生はアメリカ人の「殻の硬さを感じずにはいられ」なかったと述べている。この体験から、「相手の悪口を裁くことは簡単ですが、自らの罪をさらけ出すのは、難しいこと」を実感し、「けれども、自分たちの非を認めて、反省することがなければ、おなじ過ちを再び

おこす可能性がいつも潜んでいる」(二四七頁)と自戒を込めて述べている。

第五章「再会」では、キーフさんとの四十数年ぶりの再会が描かれている。ジョージタウン大学での研究生活の最初に行ったことが、国防総省からキーフさんの所在を確認することであった。実際には規則により職員の情報を得ることは難しいことだったが、それを根気よく頼み、住んでいる地域に限り教えてもらったというエピソードは、人とのつながりを大切にされる木村先生の人柄と行動力を物語っている。四十数年ぶりに会ったキーフさんは、病院の神父として死に旅立つ人のお手伝いをしていた。時を忘れて語りあい、別れ際に交わした握手からは、少年時代に感じたのと同じ温かい優しさが伝わってきたのだった。

「エピソード」の中では、戦時中に「軍国少年」になる以外に選択の余地がなかったこと、また自分のとった行動について考えさせるような教育者がいなかったことが残念であった、と振り返っている。自分が経験したような状況に二度とならないように、二十一世紀を担う子供たちに対して、「どんな状況におかれても、正しい判断をし、正しいと思ったことには一人でもそれを主張し、間違ったことにはあくまでも反対できる強い勇気をもって欲しい」(二七二―二七三頁)と強いメッセージを送

る。こうすることで、「当時の僕たちに、ありもしない架空の敵を作りだし、それを煽った、ほんのひとにぎりの、線を引くのが好きな、傲慢な大人たち」(二七三頁)という本当の「敵」に対抗できるのである。

バイオエシックス研究者の中で、木村先生ほど自身の人生体験を公に語っている人を紹介者は他に知らない。なぜ先生は自分の人生を語るのか。それは木村先生の生き方がそのまま学問的展開へと直結しているからである。このことは、ベトナム大学生の衝撃的な忠告が比較法学からバイオエシックスへの方向転換のきっかけになったというエピソードが、二〇〇四年一月十七日に「バイオエシックスへの出発」と題して行われた早稲田大学の最終講義のなかでも語られたことからわかる。しかし本書はさらに、木村利人バイオエシックスと表裏一体である先生の生き方を決める原体験として、多感な青少年時代の戦争体験が描かれている。

本書で語られている、負の遺産は隠さずに、語り継ぐことから、真の反省が促される、どんな状況でも正しいと思ったことは一人でも行う勇気を持つ、そして態度・行動で示さなければならぬ、などのメッセージは、すべて木村先生の戦争という究極的な体験を通して生まれ、魂の叫びとも言えるものなのである。それゆえに紹

介者の心の奥底に熱く残るのである。
木村先生の平和への願いと木村利人バイオエシックスの本質を明らかにしていただいた、恵子夫人のご尽力に心から感謝して、紹介文とする。